

あとがき

本書は筆者の学位請求論文(博士[国際公共政策]、大阪大学、2015年度)の全文に、いくぶんかの修正を加えたものである。本書の第1章から終章までは、すべて新たに書き下ろした未発表論稿であり、既発表部分を含むのは序章と補章だけである。序章は「確立されなかった対日原爆使用をめぐる定説—2015年までの研究史概観」(『広島平和科学』第37号[2015]、広島大学平和科学研究センター、2016年3月、19-31頁)に、加筆と修正をほどこした。補章は「異曲同工—アメリカはなぜ異なった2種類の原爆を日本に対して使用したのか」(『アジア太平洋論叢』第20号、アジア太平洋研究会、2014年、3-22頁)に修正を加えるとともにその分量を減らした。

本書の成り立ちを簡単に述べる。筆者は1980年代に広島大学の学部と大学院で学んだ(筆者が通ったのは広島市内の東千田町にあったキャンパスである)。そのことが、原爆の開発と日本に対するその使用の問題への筆者の関心を高めたことは疑いない。その後大学教員となってからは、核兵器が関係した冷戦史を研究テーマの1つとするようになった。そのテーマに集中的に取り組む機会を1990年代の後半に得た時に、核兵器が関係した冷戦史の始まりであるアメリカによる原爆の対日使用についての図書や論文をまとめて(20年分くらいを)読むこととなった。その成果が1999年と2000年に発表した論文である。その頃からの蓄えに火をつけたのが、それまでマイクロ・フィルムでしか見るができなかったはずの一次資料(*Bush-Conant File Relating to the Development of the Atomic Bomb, 1940-1945* など)を、インターネット上で閲覧する機会を偶然得たことだった。それは2013年5月のことである。10カ月かけてそれらの資料の山に目を通し、その間に執筆したのが本書の第1章と補章のもととなった原稿である。その後の1年間に残りの章を書き足したことによって、本書の原型ができあがった。

本書の作成にあたっては、多くのかたからご助言をいただいた。本書のもととなった学位請求論文の審査委員であった中沢志保（文化学園大学・教授。所属と肩書は2016年9月現在）、竹内俊隆（大阪大学大学院・教授）、中嶋啓雄（同）、松野明久（同）の4先生からは、批判的でしかし適切な多くの助言を賜ることができた。また田中仁（同）先生は、1945年の中国外交についてお知恵をお貸しくださった。これら5先生にはとくに感謝申し上げたい。

法律文化社編集部兼営業部統括部長の小西英央氏には、本書の出版にご尽力くださるとともに本書の内容にもご助言をいただいた。小西部長から出版へ向けたあと押しがあったからこそ本書は完成できたのであり、同部長には心からの感謝を申し上げる。

筆者が1999年に原爆投下に関して書いた最初の論文を「キワモノ」と評して、その後の研究を促してくれたのが広島大学時代の指導教官だった故山田浩先生である。同先生の代表的な著作を出版したのと同じく法律文化社から本書を出版できたことを喜ぶたい。

最後に筆者の両親への感謝を記したい。筆者が高校3年生の時に1年間休学してアメリカの高校に留学した時も、北海道の親元を遠く離れて広島の大学へ行くことにした時も、そして大学院へ進学することにした時も、いつも筆者の選択を尊重してわがままを許してくれた。筆者を信頼して見守ってきてくれた両親に、本書を奉げたいと思う。

2016年12月

著 者